



〈二年〉

暗い部屋 / 福浦 翔

ハガキに思いを込めて / 小金丸 愛友

酒瓶を投げた音が耳^じを打^{たた}った。

また、だ。また妙な声^{こゑ}がしている。

酒瓶を投^なげて誤^ご魔^ま化^{くわ}そうとしたが一向^{いっけい}に治^なま^まってはくれない。ぼそぼそと、それでいて確^{たしか}かに届^といてくる声^{こゑ}は耳^{みみ}の周^{まわり}りを浮^う遊^{ゆう}しているかのように纏^{まと}わりついてくる。

これで何^{なん}度^ど目^めなのだろうか。思い返^{おも}えそうと回^{まわ}転^{てん}させた頭^{あたま}は酔^よいで空^{そら}回^{まわ}りを繰^{くり}り返^{かえ}す。駄^だ目^めだった。もはや私^{わたし}の脳^{のう}は思^{おも}考^{こう}することを放^{はな}棄^すしているのかもしれない。

(また酒瓶^{しゅびん}を投^なげるか?)

馬^{うま}鹿^か馬^ば鹿^かしい。ついさつき……さつき、だ^{はず}った筈^{はず}だ。私^{わたし}はそれをした。

しかし良^よい結^{けつ}果^{くわ}は出^でなかつただろう。せいぜい、この汚^{よご}部^ぶ屋^やに新^{あたら}しいガ^がラ^らス^す片^ぺと刺^さ激^{げき}臭^{くさ}のする染^ぞみを生^{せい}むだけだ。

酒^{しゅ}だ。取^とり取^とれず酒^{しゅ}を飲^のんでリ^りフ^フレ^れッ^っシ^しュ^ゅしよう。

グ^ぐラ^らス^すに鼻^びを近^{ちか}づけると、かぐわしい刺^さ激^{げき}臭^{くさ}が鼻^び腔^{くわう}を覆^{おほ}った。その香^かり^りを味^{あじ}わ^わつてから喉^{のど}に通^とす。喉^{のど}を焼^やいていくのが分^わかる。この瞬^{しゅん}間^{かん}が何^{なん}もかもを忘^{わす}れさせてくれる至^し福^{ふく}のひと時^{とき}だった。

バ^ばタン。

(何^{なに}か音^{おと}がしたか? 物^{もの}が落^おちたよ
うな、鈍^{どん}い……気^きのせい^{せい}か)

おっと、底^{そこ}が見^みえてしま^{しま}っている。

予^よ備^びは冷^{れい}蔵^{ざう}庫^こにあ^あつた^ただ^だろうか。あつた筈^{はず}だ。無^む駄^だにな^なつてしま^{しま}った貯^ち金^{きん}で何^{なん}本^{ほん}も買^かい^いった。それこそ冷^{れい}蔵^{ざう}庫^この中^{ちゆう}身^{しん}が埋^うま^まつてしま^{しま}う程^{ほど}には。あ^ある筈^{はず}だ。

「おつ、お、ととつと……」

如^{ごと}何^{なん}せん足^{あし}元^{げん}が覚^さ束^{とく}ない。酒^{しゅ}は良^よいものだが、こ^こうい^いつ^つた弊^{へい}害^{がい}が^が出^でてしま^{しま}うのは宜^{よろ}しく^くない。だからこ^こそ飲^の酒^{しゅ}によ^よつて事^じ故^こ事^じ件^{けん}が起^おき^きてしま^{しま}うのだ。人^{ひと}の事^{こと}を言^いえた口^{くち}ではな^ない^いが。

それにしても、こ^こんなに長^{なが}い道^{みち}のり^りだ^だつ^つた^ただ^だろうか。普^ふ段^{だん}なら大^{だい}股^こで

十五もしない内に届く距離に目的の冷蔵庫はある。二十は歩を進めた感覚だが、まだ辿り着かない。

やけに長く感じるのは酔っているせいかな。はたまた別の、何か。

ボタン、キイ……ボタン。

「なっ、何なんださつきから……エリー、君かい!？」

二階からの返事はない。いつもの事だ。いつも通り、自室に籠っているのだろう。

だがしかし、彼女でないとするならば一体誰が。まさか強盗……いや、この家に金になるものはない。ならば動物はどうだろうか。いや、さっ

きの音はドアが開閉を繰り返しているような音だった。動物がドアを開け閉め……。

「ドア？」

一気に酔いが覚める。同時に耳元でくすぶ燻っていた声も鳴りを潜めた。

ボタン、キイ……ボタン。

キイ……。

ドアだ。二階、それも子供部屋の
ある場所からなっているように聞こえる。開けては閉め、開けては閉めの繰り返し。強盗でも動物でもない。目的がはつきりしない音だ。まるでいたずらにこちらを誘き寄せようとする悪い子供の様に。

ボタン。キイ……ボタンッ!

「ふぎけるなよ……」

沸々と怒りが湧いてくる。酒を飲んでいたせいで血流さえも暴れだした。熱い。

「殺してやる」

相手が何者かなど最早どうでもいい。人であれ動物であれ何であれ、そこを汚す事だけは許さない。いたずらなど以ての他だ。

冷蔵庫のあるキッチンに進めていた足を止める。行き先変更だ。子供部屋……こんな事で踏み入れたくなかったが、仕方ない。あの場所から一刻も早く音の正体を排除し

なければ。

階段が見えてきた。二階を灯すス
イツチを押す。

「おい、冗談じゃないぞ」

点かない。もう一度押す、点か
ない。連打してみる、点かない。壊れ
ているのだろうか。

仕方なく階段を上がっていくと、
不意に音が止んだ。今度は開いたま
ま閉じられる気配はない。やはり誘
われているような気がする。

踊り場でゴルフクラブを手に取
った。護身用ではない。

二階に着いた。暗い。唯一の灯か
りは右手にある寝室から漏れ出る

テレビの光だ。型が大きい分、光度
があるが薄気味悪い。しかし無いよ
りは幾分マシというやつだ。それに
テレビが点けられていることで彼
女が起きているのが分かった。

「エリー？ 聞こえているなら外
に出ないでくれ。君の嫌いなゴキブ
リが出てしまったんだ」

返事はいらぬ。彼女が妙な気を
起こして部屋を出てきてしまった
ら困る。一応の保険になると良いが、
彼女の事だ。何をしでかすか。もう
私には予想さえ出来ない。

ボタン。

「何だっつてんだ……」

左手の突き当りにある子供部屋
へ向かうと、近付く程に明るさが落
ちていった。流石に階段のようには
いかず、スマートフォンライトを
点ける。残り十四パーセント。三十
分もしない内に切れてしまうだろ
うが、その前に片付ければいい話だ。
自然とクラブを握る右手に力が籠
る。

『モニカ』

ネームプレートが照らし出され
る。モニカ。擦れてしまっているが
読むことは出来る。モニカ……いや、
いい。目下の課題は音を止める事だ。
金のドアノブはひんやりとして

いた。捻り、回す。

キィ……。

ドアが、開く。

ポストに何個か届いているハガキを取るのは小さい頃からの私の役目だった。

もともとそれはお父さんの役目だったけれど、離婚というものをして家にお母さんだけになった時からその役割は私に引き継がれるような形になった。

午後六時半。会社から帰ってきた私は、庭に自転車を止めてポストの中をいつものように確認する。ポストは銀色で蓋だけ黒の半透明になっていて、中が見えにくい状態になっている。蓋を開けるのが面倒で、中を覗くように反射して映る自分

の影を利用して何か届いているか確認する。何通か入っているのが見えると、時計のように数字が振り分けられている防犯用のダイヤルを回す。番号はお母さんとお父さんが結婚した日らしく、その番号を入れる度、なんで離婚したんだろうと考える。幼稚園生だった私にそれを知る由はないけれど、そろそろ教えて欲しい気も少しだけある。

ポストには週一で届く地域のトピックのようなもので、美味しそうな料理やおすすめの場所などが載っていた。

手袋を外してリュックから鍵を

取り出し、鍵を開ける。玄関のドアを開けると物置の上に置いてある二つの蝋燭ろうそくが小さく揺れていた。それはお父さんが居なくなってから始めたことで、私はそのドアから見える小さな明かりが好きだった。

床に届いていたハガキを置き、ジャンパーを壁に掛ける。マスクをゴミ箱の中に入れ、ハガキを取ろうと靴を脱いだ時、台所の明かりが植物を照らし、影が落ちていた。そのシルエットが美しく、私は思わず見入ってしまう。

多分お母さんは部屋の奥で洗濯物を入れているのだろう。でも真つ

暗だと寂しいので、明かりをつけて
おいてくれたのだろう。その気遣い
が嬉しくて、私は笑顔になる。

週一で届くこのハガキが私とお
母さんを繋ぐ、唯一の会話の話題だ
った。

社会人になって、お母さんどこ
かに出掛けることは一回あるかな
いかくらいになっていた。まして片
親なので、どこかに連れて行ってく
れるということはほとんどなく、こ
のご時世になってからというもの
もっと出掛ける機会は減った。でも
週一でお出かけスポットのハガキ
が届くようになってから、週末に出

掛けるようになった。

今週はどこに行こう。今週は食
物の特集が多いから、屋台を巡るこ
とになるだろうか。なんて今週末の
ことを考えるのが楽しくて、自然と
笑みがこぼれる。

「ただいま」

靴を脱いでリビングに向かうと、
部屋の奥から「おかえり」というお
母さんの声が聞こえた。

「今週のハガキ、届いてたよ」

お母さんの部屋を開けると、お母
さんは嬉しそうに振り向いて笑っ
た。